送球

スポ少から高校までを合わせて、本町の“御家芸”といえる送球＝ハンドボール競技は、矢巾中・矢巾北中の男女ともに県内トップクラスの実力だ。

大舞台に挑むことはできなかったものの、全ての選手が今大会で実力を遺憾なく発揮。全国を目指し続けた選手たちが、地元を舞台に激闘を繰り広げた。

熱戦　悔いなし―

全国への夢が消え、一度は目標を見失った選手たち。今大会まで、どのような思いで練習に励み、試合に臨んだのか。各チームをけん引した主将が、最後の舞台に込めた熱意を語った。

全ての人へ感謝

矢巾中男子
主将　流踊（はせおどり）大和

3年間、やってきたことを全て出すことができて、すがすがしい気持ち。部活自体ができない地域もある中、自分たちはハンドボールに取り組むことができる環境があり、この競技に関わっている全ての人へ感謝したい。

3年生にとって、最後の舞台となった地区大会。だが、3年生だけではなく、下級生も含めて、チーム一丸となり、頑張ってくることができた。

全力出し尽した

矢巾中女子
主将　細川杏莉

県大会での優勝、そして東北や全国大会への出場を目指してきた。

それらがなくなったことは残念だが、今回の地区大会に向けて、全力で取り組むことができた。優勝はできなかったが、悔いはなく、このチームでやり抜くことができて良かった。

高校でもハンドボールを続けたい。インターハイなど、中学で経験できなかった大舞台で、ハンドボールがしたい。

一番、良い試合に

矢巾北中女子
主将　阿部はる菜

「やればできる」を合言葉に、地区大会まで練習に励んだ。目標だった全国出場ができなくなった後も、部内の雰囲気は悪くならず、今まで練習に取り組むことができたと思う。

全員で、声を出して試合に臨むことができ、今まで以上にフォローし合いながら、プレーできた。技術面でも、気持ちの面でも、今まで出場してきた大会の中で、一番、良い試合になった。

だからこそ楽しく

矢巾北中男子
主将　福田修汰

1年生の時、3年生が全国大会に出場した。そんな先輩たちに憧れて、同じように全国に行くことを目指して、部活に励んだ3年間だった。

つらいことがたくさんあった。だからこそ、楽しもう、そう思い臨んだ最後の大会。接戦をものにできなかった悔しさはある。でも、みんな、頑張った。やり切ることができたと思う。この大会まで、やってきたかいがあった。